巻 頭 言

改めて「自然の経済」を思う

大阪教育大学 牧 岩男

「日本の経済」の現状把握が世間の関心事の一つになっている。経済と言えば為替レートとか株価とかしか思い浮かばない素人にとって，今の社会は「訳が分からない」の一言につきる。

この語句に関連して，すっと頭をかすめるのは「自然の経済」と言う言葉である。そして，ゴミ処理やダイオキシンあるいは「環境ホルモン」問題がテレビ，新聞，週刊誌などを賑わす一方で，地球環境維持のために種の多様性の維持を図らなければならない，「メダカを保護しよう」という話題が賑わうようになる。

「それは大変結構な風潮ではないか」と素直に喜べないのが，私の今日この頃である。「何とも言いようがない」とか「今更遅すぎる」といった語句が絶えず付いて回るからである。

「自然の経済」と言う語句は，改めて説明するのも恥ずかしいが，偉大なるチャールズ・ダーウィンがはじめて用いた言葉であり，原語で書けば“The economy of nature”となる。そして，この考え方を動物学の中に取り込み，初めて具体化したのが，我が敬愛する生態学の創始者の一人である，チャールス・エルトン大先生で，教科書「動物生態学」の中にその成果が盛り込まれている。この本は1927年に初版が出版され，1947年に第4版まで改版されている。翻訳もされていて，1955年に渋谷寿夫訳「動物生態学」と言う名前で，第3版が科学新興社から出版されている。

私が学生であったのは，そのちょっと後の1950年代後半で，経済「economy」と生態学「ecology」は語源からも関連性が強い，経済を勉強しなければいけないと先輩諸氏や同僚から言われ続けてきた。その私が前記の有様である。最もこの有様に言い訳がないわけではない。自然の経済の現代的研究の名の下になされた研究成果が生態系におけるエネルギーの流れ図として，E. P. オダムの「生態学」という本の中に大々的に取り込まれ，その後，補充された内容の多くもこれに類するものか，物質循環と称する元素の循環図であり，これでいいのだろうかと絶えず気になっていた。当時から，この経緯には批判があり，私の先生の一部，先輩諸氏や同僚は，自然の経済の維持の必要性，エネルギーの流れよりも種の生態学をと，絶えず言い続けてきたのである。

そして，近頃，大学のキャンバスで見かける雑草の花は外来種ばかり，私がヒメハヤ属魚類（アブラハヤ類）の分布調査のためと称して小河川の上流域を歩いていると，源流域が自動車，冷蔵庫そしてクーラーの捨て場ではじまっていたり，土石流防止のためと称するそびえ立つ堰堤の連続ではじまっている場面に出くわすことが多く，下流域に向かって少し下ると三面バリ・コンクリートの溝に変わってしまい，「これでは魚は棲めんわい」と思わされる場面が多いからである。これらの思いが六十代の私の頭を過ぎり，前記のように，「何を今更」，「遅すぎるわい」と言う気分にさせるのである。

しかし，ヒトの活動力はすごいと思わされる場面も多いことは事実である。ヒトの社会には思いがけないことが多くある。「ヒトのすばらしさ」に期待することにしょう。